
ソラとタイヨウのモノガタリ

KATAKO騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラとタイヨウのモノガタリ

【Nコード】

N3081N

【作者名】

KATAKO 騎士

【あらすじ】

この作品は、中二病、葛西祖、音操、arishia、聖騎士、赤釘春流の順番で

一話一話を投稿していくタイトルのままのリレー小説です。ジャンルはファンタジーです。

はじめに

はじめに。

あらずじでも書きました通り、この小説は中二病、音操、聖騎士、ペンシル、arishia、赤釘春流、コノハの一話事に次に回してリレー小説となっています。

文体、表現、などが著しく変わる場合があるのでご了承ください。尚、作者共々、読者の方に『面白い』と言って頂けるような作品を執筆できれば、

と思う所存です。

投稿日時、完結、伏線回収、などが出来ない場合もありますのでそこらへんも

ご了承ください。

ちなみに僕は楽しく書ければ、と思いこのようなりレー小説をやらせて頂いてます。

それでは本編をお楽しみください。

はじめに（後書き）

担当は中二病でした。次は さんです。頑張ってください。

1 プロローグ（前書き）

どうも、二番手「ペンシル」です。ここで自己紹介をしてもアレなので、よかったら「ペンシル」に来てください。

では、ほぼ一番手ということですが、本編をどうぞ。

1. プロローグ

夢を見ている、と。それだけはわかっている。
それだけがわかってる。

白い世界。いや、白なのか？黒かもしれない。いや、そもそも…
色として表してよいものなのか？

僕は立っている？座っている？回っている？
見えるものも、見えない。

そこに立っているのは誰？ココは誰の夢の世界？自分？そこに立
っている人？誰でもない、ナニカ？

創造し想像することさえ、ままならない。
自分の夢の世界。

ああ、それはわかった。
ならばなぜ、なぜ自由がきかない？

その問いだけは、口にしたい。

誰かが答えてくれるような、そんな気がする。

夢の世界。自分の夢に縛られた、僕の世界。

その世界に、自分でない、誰かがいる。

ああ、目が見える。目の前に、立っているように誰かがいる。そ
れがわかる

だれだ？

目の前にいる、笑っているこのナニカは、だれだ？

見覚えがない？いや、そんなこともないのか？

ああわからなくなった。また、思考の泥沼にはまるのか……

と。

体中に激痛が走る！

自分以外の誰かが、僕の体に触れている感覚がある！

だれだ！？

……いや、待て。体があるんだ。

落ち着け。落ち着いて。言い聞かせろ。自分の体を使う術を。思い出せ。聞くことを。見ることを。考えることを。感じることを。

痛みが痛みではないことに気づき。

「あなたなら、できる」

見えて。男か、女か。それは、考えてもわからなかった。ただ、肩に手を当てられていて、話しかけられていて。

「世界を救えるほどの、力を持つあなたなら」

何を言っている？今度は、考えてもわからないのかっ！？

「自分の力を、信じなさい……信じなさい……信じない？」

ダレが

この白い世界が、天井だと。

気づけば、ただの世界にいた。

確かに、ただの世界にいるんだ。

1 プロローグ（後書き）

いかがでしょうか。「次の人、困れ」の思いで書きました。

というわけで、次回、「音操」さんです。

どう膨らましてくれるのか、期待です。

2・セカイ（前書き）

どうも。音繰です。

前回の人に比べて模写力がダニですが・・・許してください（泣）
さて。本編をどうぞ

2・セカイ

「そうだ……確かに僕は世界に“居る”。この無意味で面白味の無い……そんな世界に」

そう呟くと、視界に初めて色が付いた。それは開けゴマと言ったら家が開くように。

僕が“僕自身”を知覚したその瞬間……世界は再び動き出した。

まるでパラパラ漫画の様に、色の付いていない部分から色の付いている部分へと切り替わる。

緑一色。どこかで聞いた事のある風景。現代ではもう数える程しか残されていない場所。

草の絨毯とも呼べる場所に、僕は立っていた。無論、一人で。

風が吹いた。髪がなびく。少し肌寒い。既に痛みは無い。上下左右も理解できる。

体の動かし方も支障は無い。

つまり……僕はあの夢から覚めたのだろうか？もつとも、あれが夢であるかさえ僕には知るよしも無い。大体、夢にしてみれば鮮明過ぎだ。

あの理解不能の存在……いや。アレは存在すると言うカテゴリに当てはまるかさえ疑問だ。

最後の言葉は？“力を信じる？”僕は……

……ダメだ。何も思い浮かばない……ともかく進むしか無い。

歩く。終わりの見えない道を。歩いて歩いても無意味と感じる程遠い道を。ただ、歩いた。

不思議と、疲労した感覚は無い。空腹と言う訳でも無い。足が特別軽い訳じゃない。

心がクリアな訳でも無い。眠い訳でも無い。

“体調が変化しない”…そう、考えてもいい気がする。

……日は、既に一度落ちた。そして、黄金の朝日が緑色の草原を照らす。

「…眩しい」

少しだけ、目を閉じた。風景は、何も変わらなかった。樹海の中に迷い込む様な錯覚をした。

こんなのはありえない。いや……そもそも、ここはどこだ？

……あのユメに気を取られ、初めてその答えに辿り着いた。

「ここはどこ？……そして……僕は……」

どうしてこんなにも……冷静なのはなんでだろう？まるで、今が“さも当然の様だ”。

…何故、そう考えているのだろう。

「けど、その問題には誰も答えてはくれない。だから、進むしかない」

そう。進むしか無い。終わらなくても。ただ、進むしか無い。

また、一步。足を踏み出す。恐怖が無いかと聞かれれば嘘になる。希望が無いかと言えば嘘になる。

でも、なんでだろう？

同時に…このまま足を進めてはならない。そう感じるのは……一体なんでだろう？

まあ……。

「———でもいいか…そんなツマラナイ事は」

2・セカイ（後書き）

お次の更新はarishiaさん!!!!..ちなみに、今の俺の中
では...何もありません。

後、少し冷ましました。...混乱したら口調荒げると
かですかね？

頑張ってくださいね。

PS、思ったんですが...これへたにせんと
ういれるとしぬ

ではではッ!!

3・孤独（前書き）

四番バッター「Arishia」ホームラン打てません！

とりあえず、この小説で一番長いタイトルになるのを願いつつ……

理由？　ないよ！

3・孤独

言うならば僕は旅人なんだろう。

果てのない道を歩き続ける……そこには何の感慨もありはしない
ただ足を進めているという事実があるだけ。

「空っぽみたいだ」

思わずそう呟くと自覚したせいにより空しく感じられる。

何のために存在して何の為に動いているのか……何も分からない。
そんなもの人形と大差ないのかもしれない。

一面緑一色なこんな世界を歩くことしかできない人形、ただただ歩くことなら人形でもできると知りつつそれ以外の事が出来ない。

「本当に……僕一人なのかな……」

僕は駆けた。

何かから逃げるかのように、

何かを追うように。

目的なんてあるわけじゃない。

意思だってはつきりしていない。

ただただ逃げてるのか追っているのか分からなくなるぐらいに駆け
たいと言う衝動にからだだけ。

人は一人では生きてはいけないと誰かが言っていた気がする、まっ
たくもってその通りだ……僕は僕以外に存在しないこの世界に嫌悪
感を……いや、恐怖を感じている。

だけど、同時に期待もしている。

もしかしたら僕と同じような人がどこかにいるんじゃないかということを感じ、早く会いたいと思い、誰もいないと言う事から逃げるかのように足が動かなくなるまで駆け続ける。

「うあっ!？」

そして僕は転んだ。

何かに引っ掛かったのか、疲れて足が追いつかなくなったのかは分からない。

結局誰にも会えなくて泣きたくなった……結局一人でいることを知って悲しくなった。

「貴方は……世界を救う？」

「えっ？」

突然近くで発された声に驚きつつも他の人がいたことを知って嬉しさのあまり体に鞭打って無理やり起こす。

そこにいたのは少女だった。

座り込んで目を合わせているからこそ僕が見上げる形になっているけど立ってしまったら見下ろす形になるのは間違いないくらいの大きさしかない少女。

「貴方にはそれだけの力がある……だけど、力があるのと使う事は別」

僕は最初に言われた言葉を思い出す。

誰だかわからない存在がそんなことを言っていた。

それはこの少女だったのかと思いつつもすぐにそれを否定する。
あの時の声は、あの時の姿は少女とは全く異なるものだった。
なら、あの存在は一体？

「選びなさい　貴方の力で世界を救い、貴方の存在意義をその
為だけにするのか……世界を見捨てて一人で生きるのか」

少女は透き通った蒼い石を僕に見せてきた。

石と言うより岩の欠片と言うべきだろうか？　石のような丸みを帯
びていると言うわけではなくごつごつとした表面を見せるモノ。
荒々しさの中にどこか優しさや温かさの感じられるモノ……

「世界を救うのならばこれを手に取りなさい」

世界を救うなんて大層な気持ちはなかった……ただただそれが綺麗
で僕が走り回っても欲しかった優しさだったから手を伸ばしただ
け！……

それは僕が手に取った瞬間姿を変え、僕がそれを認識する前に意識
を飛ばされる感じに襲われた。

「きっかけは些細なこと……たった一つの石を水面に投げるだけで
波紋は出来る　そう、良い事も悪いことも始まりは大したこと
じゃない。だからこそ、人は悔いるのかな？」

少女はもう誰も聞いていないこと知りつつ、ただぼんやりと呟いた。
草が少し強めの風で音をたてて揺れると少女はゆっくりと目をつぶ

って消失した……始めからそんな存在はなかったかのように……

3・孤独（後書き）

話の展開を変えないと不味いと思った。後悔はしていない。

と言う訳で「聖騎士」様にそおい！

4・襲撃（前書き）

聖騎士：著

4・襲撃

「世界」って何だよ！ “救う”ってどうすりゃいいんだよ！」

僕の叫びは風に紛れて突き抜けるような青空に吸い込まれていく。少女の消えた後にはそのぬくもりさえ感じない虚しい空間がぼっかりと空いている。見渡す限りの広大な草原は、今まで以上に広く感じる。ここが僕の“救う世界”なのか？ いったい何から救えばいいんだ。僕はどうすればいいんだ？

混乱する重い頭を持ち上げながら、僕は立ち上がる。パジャマ代わりの黒いジャージの膝には、心ばかりの草の切れ端と黒い土が付いている。僕は膝をしっかりと払って周囲を見渡す。

風は右から左へと吹いている。ここが僕のいた世界と同じ物理法則の働く世界であるならば、気圧変化があるということだ。つまり今は雲一つない青空が広がっているが、いずれは雨が降ったり雷が鳴ったりする。太陽は真上より少し左へ傾いている。さつきはもつと低かった。やはり僕の元いた世界の基準で考えると、今僕は南を向いているということだ。

風は西から東へと吹いている。僕は両手を広げ、位置を確認する。何もない草原は砂漠と同じだ。見渡す限りの牧草は、羊だったら食うのに困らないが、人間である僕には何の役にも立たない。少女が消えてから、僕は若干の空腹と喉の乾きを覚え始めている。とにかくまずは人を捜そう。そしてこの世界について情報を集めなければならない。“救う”ためには、まず僕が生きなければならない。

僕はひたすら南に向けて歩き続ける。手のひらの中にはあの青い石。ほのかな温かみを感じるのは、僕の体温だけではないようだ。この石があの子との唯一の接点のような気がして、僕はしっかりと汗をかき始めた手のひらの中に握り込む。その硬さは僕に足を前

に出す勇気をくれる。僕は歩く。風が僕の前髪を揺らし、上気した頬を撫でていく。

ちくしょう、なんで僕は歩いているんだ。何でこんな思いをしなきゃならないんだ。ただ自分の部屋で寝ていただけなのに、何でこんな何もない草原を額に汗して歩かなければならないんだ。世界を救うならもつと待遇をよくしてくれてもいいじゃないか。

学生時代はよく運動をしていたが、最近は身体を動かす機会も減っていたため、さすがに辛くなってくる。ゲームばかりしていたつまらない生活でも、今はとてつもなく居心地のよい世界だったと改めて感じる。この世界を救うにしろ脱出するにしろ、死んでしまつては元も子もない。

そう、僕は“生きる”ために歩く。それが今、僕ができる唯一のことだ。

二、三時間は歩いただろうか。真上にあつた太陽も西へだいぶん傾き、風に湿り気を帯びてくる。地平線しか見えなかった草原の向こうに、うつすらとした灰色の影が見えてくる。どうやら山の稜線のようにだ。山があるなら木や水があるはず。確証はないが今はそう信じるしかない。僕は心持ち歩調を早め、さらに一時間ほど歩くと、きらきらと陽光を反射する小川に突き当たる。対岸には木が立ち並び、その向こうは少し傾斜して丘に続いている。起伏のある地形が、こんなにも新鮮に目に映るなんて初めての経験だった。

「み、水……」

僕は小川に飛びつくようにして顔をつける。鳥肌が立つように冷たく感じたのは、僕の体温が上がっていたせいだろう。不用意に飲んだりしてお腹を壊してもいけない。とりあえず青い石をポケットに入れ、汗ばんだ顔を水で洗って頭を濡らす。小川は整地されていない自然のままの姿だ。テレビの中でしか見たことのない美しい自

然。目の前には雄大に隆起した丘と、その遙か向こうにそびえる山々。一息つくとその世界がいかにもすばらしい世界なのかがわかる。

「とにかく人を捜さない」と

ひと心地ついたことで、僕は当初の目的を思い出す。“歩く”の次は“捜す”だ。RPGだったらコマンドを選択すればいいが、今は僕の頭で判断し、僕の身体で行動しなければならない。コントローラーの指ですべて進んでいく世界じゃない。僕は素足を小川に差し込んで、ゆつくりと渡る。水深はさほどではないが、多少流れがあるため太ももまで捲ったジャージの裾に水が跳ねる。小川を渡り切ると、僕は傍らに立つ木に手を着いて、ジャージの裾を戻す。タオルがないので、濡れるのは仕方がない。水で張り付く脛に顔をしかめながら歩き出そうとすると、遠くに人影が見える。男か女かわからないが、とにかくあの少女以外では初めて見る“人”だ。

「おおーい!」

僕は嬉しくなつて走り出す。何度も大声で呼びかけながら、大きく手を振る。助かった。とにかく何か食べ物を分けてもらおう。それにちゃんとした服や靴も。そしてこの世界の情報を集めよう。何せ僕はこの世界を救う存在らしいから。

「おおーい、おおーい!」

黒い人影が身動きする。僕に気づいたようだ。

「おおー…… いったい?」

人影はいきなり空中へ飛び上がる。そして急激な角度で曲がり、

僕の方へ飛んでくる。それは人間ほどもある巨大なスズメバチだった。

「うわぁ！」

僕は元来た方へ走り出す。不気味な重低音が背後から迫り、僕は恐怖で頭が真っ白になる。ポケットの中では、青い石がほのかな光を発していた。

4・襲撃（後書き）

次回赤釘春流様です。

よろしくお願いいたします（*^|^*）

5・戦線蒼々、少女は笑む。(前書き)

うおおい?(・・)

無茶振りk t k r w w

ども、赤釘春流です、力不足だとは思いますが、何とか書くことにします。宜しくお願いしますM(、、)(M

5・戦線蒼々、少女は笑む。

走る、走る、走る。風が心地よいのが逆に腹立たしい。

後ろから追ってくるのは何だかよく分からない巨大なスズメバチ。そう、

スズメバチかどうかは定かでは無いが、確かにそれは、元々僕が居た世界の生き物と酷似していた。変わるのは只、大きさのみ。「追ってくんやよ!」

走りながらそう叫ぶ。しかしながら、スズメバチは止まらない。その羽を仕切りに動かしながら、僕に近づいてくる。全速力で走る物の、中々スズメバチとの距離に差は出来ない。

「キシュシャシャシャ……」

スズメバチは、顎をモゴモゴと動かしながら口から何かを吐き出した。

「あつぶない!」

僕は何とかソレを避ける。

胃液のような黒い物体は、地面に当たった途端『ジュツ』と言うような聞きなれない音を発して地面の土を50センチほど溶かした。「っ!」

僕はソレを見て驚倒する。そして。

「そ、そんなのありかよおお!」

さらに足に力を込めて走り始めた。スズメバチは、毒の第二発目を放つべく、再び口をモゴモゴとしている。

何? コレ何? なんて僕はこんな得体の知れない化け物に襲われてんの? 僕、何したの!? と自分に何度も問いかけるが答えは見当たらない。

そして、そのスズメバチは毒の第二弾を発射しようとした。

くそっ、このままじゃ殺られてしまう! 何か武器は無いか?

棒でも、石でも構わない! 何でも良いから対抗できるような武器

を。

ふと、偶々ポケットに手が触れた。そこには、膨らみがあった。ポケットに手を通り込んで、その膨らみを取り出してみる。ポケットにあったのは。

「……」

蒼い石。

「これだ！」

何か、世界を救う事が出来るとか言う大それた石らしいけれど……。

こう言う時は、仕方無いよね？

「うおおおおお！」

振りかぶった。そして身体を捻り、回転のパワーを腕に持つてきて、指先に力を集中させる。

投げた。

全力投球、食らえ。スズメバチ

野球など一度もしたことのない僕にしてみれば、恐らく上等な方であろう弾を投げたはずだ。

そう、時速に換算すると。80キロ！ 当たれば地味に痛いだろう。

その時速80キロの剛速球は、見事にスズメバチに向かっていき、そして。

見事に外れた。

「……」

やっぱりか。

「キシユアアアアア！」

「嫌あああああ！」

死ぬ！ 死ぬ！ 絶対に死んだ！ 1秒後には死んでいる。うわ、短い人生だったな。

まるで走馬灯のように今までの人生が脳裏に流れていく。走馬灯のように……。

最悪の人生だったな……。

「キシヤアアアア！」

「……」

でも、でも死ぬのはやっぱり……っ！

「嫌だああああ！」

僕は、身を屈めてそう言っていた。怖かったのだ。自分の存在が消え去ってしまうことが。自分と言う存在がなくなってしまうことが。

瞬間、轟音。

一瞬、大地が揺れてしまったのかと思うほど大きな音だった。

「え……？」

僕はふと顔を上げる。そこには、スズメバチの残骸があった。グシャグシャになって、スズメバチであったのかすら分からない。とにかく、バラバラになっていた。

「……え？」

僕は、状況がよく理解できていない。なぜ、このスズメバチの化け物は死んでいるのだろうか？ それも、こんな粉々の状態で……」

考えてみる。しかしながら、何も思いつかない。

ふと。

「おいおい」

後ろからそんな声が聞こえた。

「っ！」

僕は警戒して背後を振り向いた。そこに居たのは、少女だった。金髪の少女で、とても愛らしい顔立ちをしている。子猫か子犬のような瞳を、強気な風に僕に見せ付ける。短パンと言う、とてもラフな格好だ。

また、胸元に包帯を巻いている。半裸に近い格好だ。

少女の右手に置かれ、肩に立てかけられている長い筒のような物の先端からは煙が吹いていた。

「……」

僕が呆気にとられていると、少女はいきなり僕の元にツカツカと歩いてきた。そして言った。

「蒼石をあんな風に乱雑に使うな」

そう言って、僕に蒼い石を渡してきた。

「あ、ああ……」

「返事は!？」

「えっ? あ、うん……。分かった」

僕がそう頷くと、その少女は鮮やかな微笑みを僕に見せた。

「宜しい」

だ、誰だこの女は……?

5・戦線蒼々、少女は笑む。（後書き）

じゃあ、コノハs宜しくお願いしますv>w<v

そして、かなりふざけてしまいました。すみません（笑）

それから、フラグを叩き割ってしまい申し訳ないです、書いた後に気づきましたw

上手く繋げて下さい、お願いします（懇願）

では^^

6・罪深き能力（前書き）

コノハです。他の作者様と比べて著しく描写力、構成力にかけます。他の作者様方、迷惑掛けるかも知れませんが……。

6・罪深き能力

「さて、まずはお前が持つ疑問から答えていこうか」

短パンにサラシというラフな格好の少女は、やはり口調もラフだった。彼女が肩に担いだ筒……これが何か、僕は知っている気がする。ただ、今思い出せないだけで。

「え、あ……」

「この武器は『ロケットランチャー』という。知っているはずだ」

「え、あ……そういえば」

確か、そんな名前の武器だった気がする。でも、どうしてこんな草原ばかりで科学の『か』の字もないような場所で、こんな少女が……？

「だが、甘い。発射機構も照準も弾薬数も何もかもがデタラメだ。こんなもの、使えて一発、運が悪ければ不発だったぞ。……聞いているのか？ お前は一体どんな記憶をしているのだ？ たしかに『果てしない火力の重火器』という名目で私は生まれたが、いくらなんでも基本武器がこれではあんまりだ。もっと基本を押さえて、マシなフォルムと威力をだな」

戸惑う僕をしり目に、目の前の少女はぶつぶつと不満を言い続ける。え、何この子。なんでこんな風にあたかも『僕のせい』みたいなことを言ってるの？ え？ まるで、そう、僕がこの子の武器を生み出した見たいな

「なんだ？ 不思議そうじゃないか。言われなかったか？ 『力がある』と」

「い、言われた……けど」

言われたけど、それがなんだって言うんだ。事実、僕は巨大な虫でさえ、倒すことができなかった。……それなのに、世界を救うなんて、無茶すぎる。

「お前の力が何か、お前は知らないのか？」

少女の問いに、僕はうなづく。

「ほう。それは意外だ。こういう勇者は自身を自覚しているものだとはかり……いや、これもお前の偏見か？」

さつきから少女が何を言ってるのかさっぱり分からない。

「来た道を戻るぞ」

「へ？　なんで？」

もしかしたらまた、巨大スズメバチがいるかも知れないのにどうしてわざわざ戻ろうなんて……。

「水がいるだろう。私は大丈夫だが、お前はそうではない。食わねば飢える、飲まねば渴く、寝なければ狂う。その程度のことも理解できぬほど愚かではないな？」

うなづく。そりゃ、僕だって食べなきゃおなかすくし、今だって水は飲みたい。けど……。

「……はあ。まったく、臆病な奴だ。さきほど私の活躍を見ただろう。たとえ一個大隊で押し寄せてきても、退けてみせる」

「……？」

一個大隊？　何それ。

「……軍事知識はなしか。それでよく私を……」

「何か言った？」

「……あとで教える。とりあえず立て」

少女に手を引かれ、僕は立ち上がる。何か足りないと感じて、すぐに思い出した。

「あ、蒼石が」

投げてどこかへいつてしまったんだ。探せる、かな。僕はしゃがみ込み、周りの草をかき分け石を探す。

「……お前が探しているのは、これか？」

「え？」

少女の手に握られていたのは、まぎれもなく、蒼石だった。

「あ、そ、それだよ！　返して！」

「効能も意味もわからないものを、持っていて意味があるのか？それともお前、レア物とはにかく蒐集するクチか？」

「そんなじゃないよ！大切なものなんだ！」

「……ふん。まあ、いい。私が教えてやるからな。ほら、大事なもののなんだろう？　しっかり保管しておけよ」

荒い口調とは裏腹に、少女は僕のところまで歩いてやってきて、蒼石を手渡ししてくれた。僕は立ち上がり、石を受け取る。

「……水辺へ行くぞ。食料はなくても水さえあれば命は繋げる。

……こい」

「わかったよ」

いきなり現れた少女に命令されるのを不思議に思いながら、僕は少女についていく。向かうのはさきほど見つけた小川だ。

「……あその水、飲めるの？」

おなかを壊すんじゃないかって思ってた水は飲まなかったのだけだ。ど……。

「飲めるさ。最初は辛いかな」

「……え」

「最初は腹も下すかもしれない。が、最初だけだ。その水を飲まねば『死ぬ』と身体が判断したら、勝手に慣れる」

「も、もしその最初で脱水症状起こしたら……？」

「死ぬにきまつてるだろう」

「そんな危険なことできるか！」

「なら、死ぬか？」

僕は言葉が返せなかった。少女は足を止め振りかえり、僕の手を取った。

「不安なのはわかる。死にたくない、というのもわかる。私だってこの世界に何があるのか知らない。もしかしたら、あの水を飲めば死ぬかもしれない。が、飲まねばいずれ死ぬのだ。私だって、あの水を飲むのには、勇気がある。……お前は、たかが水、と笑うか？」

僕は首を振った。少女はそうか、といって踵を返し、また小川に向かつて歩き出した。

「私は水を飲む。が、お前は好きにしろ。飲んで腹を下し、脱水症状に陥って死ぬか、水も食料もロクに見つからんこの世界で、まだ見ぬ飲食料を探して歩き、その果てに死ぬか。……今私が想像している未来は、その二つだ」

「ずいぶん辛気臭い未来だね」

「……まだ、生まれたてなのだ。明るい未来と言うのが想像できない」

「え？」

今度は、ちゃんと聞き取れた。生まれたて？ 一体何を言っているの？

「……一応、説明に入るか。そうでもしなければ、お前はこの先、ありもしない『潜在能力』にすぎることになりそうだ」

呆れるように言って、少女は僕の手を見つめる。……正確には、僕の手の中にある蒼石を。

「その蒼石は、お前の能力を確立する『サポーター』だ」

「……僕的能力？」

そう言えば、僕には『世界を救う力がある』とか何とか。

「正確には、私もわからん。が、お前が強く望み、強く所望したときその石を投げれば……それはお前の意思通りに、形作られる」

「……？」

つまり、何かを作れる能力ってこと？

「まだわからんか？ お前の能力は遥かに強力だがお前は弱い。

お前ごときが炎を操ったり世界を救う力を直接持ったところで、何も出来やしない。そこで、私たちが要^いる」

「……君『達』が？」

達って、どういうことだろうか？

「私はお前が先ほど望んだ、『武器がほしい』という意思に呼応して作られた、お前の『サポーター』だ」

下唇を噛みながら、少女は言った。その表情は暗く、親の仇でも見るような目で石を見ている。

「……ど、どうしたの、怖い顔して」

「どうしたの、だと？　これがどういう意味かわからないのか？　私はお前の『サポーター』だ。世界を救うために『造られた』、いわば人造の人間だ！　私には武器の知識を主に、お前をサポートするためのあらゆる知識がある。それがどういう意味かわかるか！？」

歩みを止めず、それでも怒鳴るように、少女は言う。

「私はお前のための存在だ。自意識もある、人格もある、自由意志もある！　それなのに、私の存在価値は『お前の道具』なんだ！　お前のために生き、お前のために死ななければならぬ！　私はこの先あらゆる場所で、お前のために戦わなければいけないのだ。……この気持ち、生まれながらに他人に従属させられる『物』の気持ち、お前に……！」

そこまで言っ、少女は怒鳴るのをやめた。力なくうなだれ、絶望したように歩み続ける。

「……悪かった。お前に言っても、仕方なかったな。すまなかった」

僕は、何も言えなかった。少女の言っていることが何一つ理解できなかったからではない。理解できたからこそ、何も言えなかった。僕が、この子を『造った』。だからこそ、僕は何も言えない。確かに、僕の能力は強い。世界を救うことも容易いだろう。……けど、僕は新しい能力を使おうとするたびに、こんな風に悩んで、苦しむ人間を生み出すのか？

そんなのは、嫌だ。

「……僕は、君を……」

「なんだ」

「……違った。君の名前を、決めないとね」

僕はこの能力を使いたくない。それなのに、この先、僕の能力が

必要になることがわかる。……この少女のような人間を生み出して
しまうことがわかる。

「……名前、か。……そうだな」

少女は悲しげな微笑みを浮かべていった。

「どうするのだ？ 『奴隷一号』にでもするか？ ふふふ……」

ものすごく自虐的になっている。僕に能力を説明するまではこう
じゃなかったのに、どうしてだろう？

……もしかして、この子が能力云々気付いたのって、説明しよう
とした時なんじゃないだろうか？ 僕に説明をしようとして、そし
て初めて、僕に生み出されたことの意味に、気づいたんだ。

「そんなことしないよ」

やはり、僕的能力は強い。けど、罪深い。……できることならも
う、二度と使いたくない。

「ならば、どんな名前にするのだ？」

「……そうだね、君は」

僕は、少女の名前を言った。

6・罪深き能力（後書き）

お読みいただきありがとうございました。無茶な設定＆無茶な展開、無駄にシリアスという三『無』そろった私でした。

ではでは、お次は中二病さん……で、よろしいんですね？ 間違っていたらどうしましょう……？ それでは、失礼します。 間

『キャラクターの名前を入力してください』

7・二人の名前（前書き）

7番、バッター。チュウ・ニビヨウ。

…7番というのが僕の位置をよく表してますね（笑）

今回の文ははっきり言って糞です。

謙遜ではなくマジです。……出来るだけ頑張って書きました。

7・二人の名前

「ハハハハハッ！」

僕の考える限りで出した名前に少女は笑う。……その態度に少し僕はイラついた。

笑うのを辞めると、またいつもの端正な顔付きへと戻る。

「……すまないな。君のネーミングセンスに少し笑ってしまった」
少女は弁解するかのように言うが、少し嘲笑が込められていた。
僕が少女に付けた名前、それは

『ソラ』

クールで人格のある彼女には相応しいのでないか、と思い付けた名前。

蒼石の色にも掛けている。

「……結構、良い名前だと思っただけだなあ」

僕が落ち込む仕草を見せると、

「まあそんな落ち込むな。あ。そうだ、まだお前の名前を教えてもらってないな。教えてくれないか？」

その質問に少し僕は押し黙る。……あまりされたくない質問だったんだけどな。

「僕の名前……？ ああ……。忘れたよ。正確に言えば記憶に無いと言った方が正しいかな」

「……それは何故なんだ？」

ソラは急に凛々しい顔になり、僕に尋ねてくる。どうやら僕に深い事情がある事を悟ったらしい。

「僕はね……ある日夢の中で言われたんだよ。『君は世界を救う存在』とか宗教染みた事を言われてね。

その時、僕は何を言ってるんだ？ みたいな感じで受け流してた。どうせ夢だろう、と。

そして僕が起きた時にはもう「

「 全て記憶が無い、と」

「いや違うよ、ソラ。『夢』の中の詳細だけは全て覚えてるんだよ。面白い事にね。

……だからね、ソラ。君の気持ちは良く分かるんだよ。僕も道具なんだ。

世界を救いだす為だけに使命を負わされた、ただの不運な人間、それが僕」

「そうか」

「だから僕は旅をしてるんだ。それが僕の『答え』を出すためだと思ってる」

「……すまなかったな。ついお前の事を知ったかのような口を聞いてしまつて……」

「いいよ、そんなの。気にしてないから」

嘘だ。本当はいつも気にしている事なのだ。自分が何処に住んでいたのか？

名前、自分の詳細、全て分からない。全ては闇の中。

そういう所はソラと一緒に。唯一無二の存在。

「だからさソラ……。このセカイを作り出した神にさ……」

「 僕たちは『道具』じゃないって見せ付けてやろう」

僕のこの豪快な発言にまたもやソラはニヤリと微笑む。心なしか物凄い嬉しそうだ。

「ふふふ。今日一番のギャグじゃないか？」

「……どうせ僕のギャグは面白くないよ」

そしてソラは立ち上がって、僕を見下ろす。

・・・

「休憩したから行くぞ。タイヨウ」

「どうしたの急に？ 太陽になんか話掛けちゃって……まさかそれ僕の名前とか？」

「そつだ。お前にも名前がないのだろう？ だから私も名前を付け

てあげたのだ。感謝するがいい」

何か物凄く偉い事をしたような態度。……僕は低い声で呟く。

「……ネーミングセンス」

「何か言ったか？ タイヨウよ」

物凄い凝視してくる、ソラ。その眼は、『変な事言ったら殺すよ

？』みたいな視線で満ちている。

「いや別に……ハハハハ」

僕は力なく笑う。

その時、森の静寂を破るかのようにカラス達が空へと消える。

後方で何かが飛んでくる音がする。それも一匹じゃない、最低でも三匹。

すぐに何が飛んできているのかは分かった。

先程の
化け物と称してもいい、大スズメ蜂の総襲来だった。

7・二人の名前（後書き）

……ここまで読んでくれてマジで感謝です。

僕の文で読者の皆様の中に

『中二病いらなくね?』みたいに思われる方も居られると思います
が……

暖かい……それでいて生ぬるい目で見守ってくださいとありがたい
です。

次は『ペンシル』さんです。

僕の駄文ではなく、さんの文を読んで目を潤してください。

それではsee you again!!

8・再び（前書き）

のターン！ ふ……伏線が来るよう、状態じゃなくてよかった。

8
再び

「嘘だあッ！」

「現実を見ろ！ 襲い掛かってくるぞ！」

戰鬥開始！

みたいなことにはならず。

僕のコマンドは「逃げる」の一択だけ。

「タイヨウ！ 逃げるな、前を見ろ！」

「無理です！」

走る。走る。ソラを小脇に抱えながら、全力で走る。

「ええい、離せ！」

「ッ！」

痛い、噛み付かれた。なんだこれ、僕誘拐犯みたいじゃん。

「バスーカドーン！」

「ええええええええええ！？」

バズーカでドカンドカンと撃ち落としまくる。もちろん、頑張ってるのはソラだ。

「ちっ、弾切れだッ！」

「これ、使う？」

「タイヨウはさっきの話を聞いていたのか!？」

僕が取り出したのは、蒼い石。先ほど投擲し、拾ってもらった石。ふざけるな！」

「ふざけるな！」

「ふざけてないよ。世界を救うのに必要なら、今、使うべきものだ。僕らが生きなきゃ、世界は救えないだろう?」

その間にもハチの大群は襲い掛かっている。ソラがバズーカを振り回して応戦している。いや、バズーカの使用方が間違ってるから。そして、こういう腕力してんの。

「くそつ、逝けやこの虫共オオオオ！」

バズーカに装填された弾は八チの大群の中心に飛び、

炸裂した。

「オオオオオン……オオオオオオン」

八チの鳴き声が聞こえる……鳴き声？いいのか、鳴き声で。

「ホホ……お見事」

不意に、新たな声がする。ソラがまた、バズーカを構えた。

「どうも始めまして。幸せを売る行商人です。落し物ですよ……」
行商人を名乗る……男、か？大きなバッグを背負い、揉み手をしてしながら笑っている。

その手から、先ほど炸裂したはずの、石がでてきた。

「その石の真の使い道は先ほどのものとは違います……信じなさい」
なんだ、コイツは。僕は顔だけソラの方を向いた。

ソラは震えていた。

僕にはそれだけでわかる。

「おや、お嬢さん。怪しいと思っていますか？　幸せが訪れますよ、信じなさい……」

「アンタ、何者だ！」

「私は^{わたくし}幸せを売る商人です。とある目的があるのですが、生憎この世界に迷い込んでしまいましたね……この世界を救える少年よ。島を出たければ、島を壊しなさい。そうしなければ、あなたはこの世界の泡となる。信じなさい……」

「おいっ！」

「私に会ったことがあると思うのなら、それは夢のまた夢と……信じなさい。……ああ！　この世界は、あなたの夢なのでしょうか。あなたに創造の力があるのはなぜ。では救うべき世界は……」

自分の世界にでも入っているのだろうか、コイツは。目が、僕やソラを捉えていない。

「ホホ……ナンナノデショウネエ……………」

ふと、我に返ったように、行商人がこちらを睨んだ。

「その石。手放さないように気をつけなさい。さもなければ、災いがありますよ。信じなさい……………信じなさい……………ホホホ、ホホ……………」
行商人が、消えた。

がくん、と。

ソラが地面に着く。

「なんなんだ……………あれは」

僕が呟いたのか、ソラが呟いたのか。
わからない。

「ホホ、早くしてください……………終われば、こんな世界……………とつととおサラバしちやいますから……………ホホホホ……………」

僕はどうすればいい。
わからない。

8・再び（後書き）

音操さん、次よろしくお願いします。

どうも。音繰です。あ、今回正直アレです。すいません。

後、さん。俺にどうしろと!?!...まあ、こうなりました。

一体なんだったんだ？わからない。アレは一体…？今感じた悪寒は？そして、“災い？”“島を壊せ？”…ダメだ。とにかく…。

「ソラ！！大丈夫？」

「ハア…ハア…」

今はこっちを何とかしないと…！！

「大丈夫？」

「…ああ」

近づいて、ソラに手を伸ばす。ソラはその手をやや悔しそうな表情で掴むと、立ち上がった。

やや息が荒々しい。けど、それももう直ぐ収まりそうだ。よかった…。

「すまない…」

申し訳なさそうに言うソラ。でも、それは間違いだ。

自分も、動けなかった。体が凍り付いていた。それが恐怖なのかさえもわからない。

何故なら…思考まで凍て付いたから。…アレは“化け物”だ。僕達“人間”とは永遠に分かり合えない。…不思議と、そう感じた。

「そんな…謝る事じゃないよ。それよりも…なんなんだよ。さつき

の奴は」

「…わからない。だが、わかる」

「え？」

「アイツには“関わってはいけない”。何があろうともだ…!!!」

「…ソラ？」

自らの呼び出された理由の時の様な怒りでは無い。…本当に生理的に受け付けられない存在に対する怒り。無条件で湧き上がる殺意。ドス黒い感情等目では無い。それは既に“色”ですらない。色と表せる程理解しやすい物ではない。

…とにかく、なだめないと。

「…僕もそんな事はわかってる。アイツは理解出来ない。存在としてね。だから…」

「…タイヨウ？」

「理解なくていいよ。今は…まだ」

不思議だ。アイツの事を考えるだけでイライラする。…やめよう。

「おい。どうしたんだ？頭でも打ったか？」

「そんな事ないよ。さあ、行こうよ。あの化け物が来る前にさ。――々あの耳障りは羽音を聞いていたら耳が痒くなる」

「おいおい…なんだそれは？」

「ははは…どうでもいいじゃん」

そして、ここに来て初めて気づく。ここはまだ草原だ。そして、さっきの戦闘を行った時に村の様な物が見えた。けど…。

「：ロケットランチャー持ったまま村に入るつて。世間一般から見
てどうよ」「

顎に手を当て、やや気まずそうな表情を浮かべるソラ。…ですよねー。僕がそんなの見つけたら包丁構えて「斬刑に処す」とか言いかねないし。

「超が付く程の不審者だな」

「やっぱり？…そうだ！！これは野球のバットですとかは？」

「この世界に野球があるかどうか知らないだろッ！それと、黒光するバットって何だ！？」

あ、そっか。黒光するバット？…アレだよ。アレ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だよ。まあ、それはどうでもいい。

…じゃあ…これは？

「ホームランバーチョコ味とか」

「それはアイスだろ!？」

「まあね。取り合えず行こうよ」

[illegible]

「やなこつたっ！！さあ、大体もうすぐだ！！走るよ！！」

村の方へと走りだす。後ろからはすっかり元気になったソラ。うん

！！元気が一番だね。
…それにしても。

ポケットから蒼い石を取り出す。
けど、その石は僅かに変色していた。水晶の左端が、使っ前に比べ
ると違っていた。
光輝く蒼では無い。——それはさながら藍色の様な…限りなく黒
に近い青色へと。

お次は・・・arishiaさんですかね。頑張ってくださいwww

後、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲
は画像検索でググれば出てきます(多分

後、最後のコレは・・・シリアスな文が書きたかっただけなのでw
ww別にへし折っても全然いいですよwww

() ズエアズエア

・・・ハクメンとかわかる人いるのかな。ほんと

10・別に……あえてネタでいっても構わんのだろう？（前書き）

A r i s h i aです……

タイトルで言っているほど面白くないです……シリアスな空気を壊してすみません。

10・別に……あえてネタでいっても構わんのだろう？

「野球をしよう……チーム名はリトルb「人数が足りないだろ」最後まで言わせてよ……」

「

はい、タイヨウです。現状の報告をいたしますとRPGとかでいう村一步手前と言った所

で例の物……78%、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲。22%

、野球のバットで構成されているこれらの処遇についてだ。

「なんなんだ、その微妙な比率は……」

「地の文に突っ込みはよくないと思います」

「……お前達何をしているんだ？」

村人Aに遭遇した！

……まあ、村の前で不審物持つて騒いでたら気になるよね？
ここはノリと勢いで誤魔化そう。

「たのもう！ 私達はこの村で一番強い野球チームに挑戦しに来た！」

「結局それなのか……と言うより野球があるかどうかも分からんだろっ……」

「ま、まさか！ あの「何だかよく分からないけどとりあえず強いな」チーム」か！？」

「あるのか！？ と言うよりチーム名が長すぎだろう！！ 第一私達は二人しかない！」

「！」

「何を言っているんだ？ 相棒……俺達が組めば守備なんて必要ないだろう？」

「くっ！ あの噂は本当だったのか！！」

「どんな噂があつたんだ！？」

ソラはノリと勢いに任せるのが苦手らしい……僕がフォローしなくちゃ！

とりあえず僕はソラの肩を掴んで大きく揺さぶりながら、

「相棒！ あの時の暑い夏の戦いを忘れたのか！？ 甲子園で汗と涙を流したあの熱い心」

はどこに行っただよー!」

「そんなものは知らん!　と言うより野球なんてしたことはない!」

「それだけ厳しい訓練をしたと言う事が……クッ!　泣かせるねえ!　もしかしたら熱い

プレイをすれば思い出すかもしれない!　俺達のチームでよければ相手になるぜ!」

ヤバイ……このおっちゃん良い人すぎる……

見ず知らずの俺達にここまで尽力してくれるなんて!　優しすぎて涙が出てきた。

「私か!?　私が変なのか!?」

「ソラ……大丈夫。俺達の最強バッテリーは不滅だ!」

「良い話じゃねえか……待ってるよ!　今すぐ用意してやる!」

「だからなんなんだああああああ!」

ソラは興奮状態からなかなか醒めなかったが無理やり村に無事に入れたと言い聞かせて落ち着けていた。

まあ、僕自身もは入れただけで良かったけどやっぱり乗ってくれたからには乗らないと矢

礼だね？

と言っわけで急遽野球をすることになった。

不思議なこともあるものだね！

「本当に二対九でやるなんて……」

「大丈夫だよソラ！ 諦めたらそこで試合終了だよ！」

「それは野球じゃないでしょ……」

「いざとなればネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を使えば大

丈夫！」

「本当にこれは武器だったのか！？」

ソラはもう少しノリと勢いを身につけるべきだと思っ。

そんなことを思いながら試合開始のコールを待った。

「プレイボール！」

10・別に……あえてネタでいっても構わんのだろう？（後書き）

肝心のネタを放り投げるという酷さ……次は「聖騎士」様かな？
本当に申し訳ありませんでしたああ！！！！

11・ソラとウミとタイヨウと

「起きろ、おい！」

荒々しく揺さぶられ、僕ははっと目を覚ます。目の前にはサラシを巻いた金髪の少女。「ソ……ラ？」

「ああ、私だ。ひどくうなされていたぞ」

僕は頭を一つ振って周囲を見回す。うつすらと山の稜線が白んでいる。まもなく夜明けだ。

「うなされてた？」

「まあ、時々笑いも混じってたがな」

口の端を心持ち上げる仕草がこの娘にはよく似合う。巨大なスズメバチに襲われ、得体の知れない行商人に出会ってからのというもの、どうにも僕の心はかき乱され続けている。テンションが上がったり下がったり、さっきみたいなわけのわからない夢を見たり。何が野球だ。

「今日にはたどり着けられたらいいな」

「ああ」

ソラの差し出す固い肉にかぶりつく。ほんの少し見えた村へ向かって歩き始めて三日、僕たちはまだ森の中を彷徨っていた。あれは確かに人工物だった。僕の見間違ひなんかじゃない。それほど遠くに見えたわけでもないのに、一向にたどり着かない。何かに化かされているような気持ちだ。

幸い、ソラのおかげでまだ僕は生きている。敵に対してもそうだが、生きるために必要な知識や技能を、ソラは確実に身に付けている。まさに「サポーター」だ。森を駆けめぐり野生のウサギを捕まえてきてくれる。木の実をくりぬいた水筒に湧き水を汲んでくれる。原始的なやり方ではあったが、錐もみ棒で火も起こしてくれる。

サバイバルテクニクっていうのかな。ソラには僕に欠けている技能がすべて備わっている。それもきつと「サポーター」の力なの

だろう。

「なあ、“島”ってなんだと思う？」

その単語を口にするの不快感が蘇る。「島を出たければ、島を壊しなさい」とアイツは言った。単純に考えれば今僕たちのいるここが“島”で、ここを壊せば脱出できるということだ。ただ単に壊すだけならこの石を使えばいい。僕はポケットの中の「サポーター」を握りしめる。こいつをぽんと投げて核ミサイルでもぶちかませばいい。僕には使えないが、キムなんとかってデブが出てきて赤いスイッチでも押してくれるだろう。でもそれでは僕やソラまで死んでしまう。何かカラクリがあるはずだ。

たどり着けない村。“島”の謎。巨大なスズメバチ。「サポーター」という僕的能力。

寝ている間に連れて来られたこの世界には、僕でなければならぬ理由があるはずだ。まずはそれを探さなければならぬ。火の始末をしているソラを見ながら、僕は立ち上がる。

「もう出発できるのか？」

この世界で唯一心許せる存在。この娘とこうして旅を続けるのも悪くない。けれどもそういうわけにはいかないだろう。いや、そうさせてはもらえないだろう。朝靄に煙る森を、僕たちはまた歩き始める。今日もまた一日歩き回って終わるのだろう。そんな僕の怠惰な思考は、半日もすると大きな間違いだったことに気づく。

「タイヨウ、あれ見ろよ！」

ソラが緩やかに傾斜した林間を駆け下りていく。その先に見えるもの……海だ。

「わあ、タイヨウ、これが“ウミ”ってヤツか？」

切り立った崖の上で、ソラのお金髪が海風になびいている。両手を広げ、潮風を全身に浴びるソラは、無垢な少女のようにきらめいて見える。

「ああ、そうだ。これが海だ」

遙か下方数十メートルでは白い波頭が岸壁に崩れ、虹色の水飛沫

を上げている。左右を見回すが、どちらも切り立った崖が続き、森と海と青空しか視界に入らない。

「飛び降りたら死ぬな」

崖から身を乗り出して下方を眺めていたソラは、振り返っていたずらっ子のように笑う。白い鳥が海風に乗って滑るように下降していく。翼があれば飛んでいけるのに。

「あそこに行ってみよう」

僕は少し南に見える岬を指さす。少し突き出た岸壁の先に、青々とした草むらが見える。その向こうは岬に遮られており、よく見えない。崖の上を当てもなくひたすら歩くよりは、たどり着ければその先に何かがあるかもしれないという期待があった方がいい。

「じゃ、競争だ！」

ソラは足を大きくスライドさせて走り出す。このツンデレ娘め。そう心の中で呟きながらも、進展のあった旅に心が沸き立つのを感じる。

海と島は密接な関係がある。もしここが現実世界でいう“島”ならば、あのあやしいヤツの言ったことが少しわかってくる。飛行機のように両手を左右に広げて走るソラの躍動的な背中を見ながら、僕は半ば本気で追いかけて行った。

11・ソラとウミとタイヨウと（後書き）

強引に自分の世界に引き戻しましたw
次回赤釘春流様です。

よろしく願いいたしますm（ （ （ m

12・黒の少女とピエロ（前書き）

赤釘です^^

駄文ですが、頑張ります><

12・黒の少女とピエロ

ある世界での物語。

ここは果たしてどこだろう？ 白と黒と、ちよつとの赤が混じつた世界。

この世界に上下左右はなく、まるで無重力体験をしているかのよう
に二人ともフワフワ浮いている。

世界はグニヤリと歪みを見せる。絶え間なく赤と白と黒が流動体
のようにグニヤグニヤと動いている。

その眺めを数分間見ているだけで、平衡感覚がおかしくなりそう
だ。

「ホホホ……」

ピエロのような鼻をしている赤髪の男は笑った。ピエロが手に持
っているのは、まあい水晶玉だ。水晶玉は鮮やかな光を発しなが
ら、映像を映し出している。

ピエロが見ている映像は、サラシを胸に巻いた半裸に近い女と華
奢な肉体をした男だった。二人は、断崖絶壁の岬で潮風を浴びてい
る。

「ホホホホホ」

その様子を見て、ピエロは心底気持ち良さそうに笑う。

「相変わらず良い趣味をしているわね」

虚空から声が聞こえる。ピエロが顔を上げるとそこには黒髪の少
女が居た。

「覗き見だなんて」

「ホホホ」

ピエロは相変わらず乾いた笑いをする。

「いえね、兄が彼らにアドバイスをしたものですから気になって」

「……ふうん」

「ホホホホ」

ピエロは笑う、それに対して少女は眉をひそめた。

「……本当に貴方達兄弟って似ているわよね、話し方まで。嫌なくらい」

「双子ですから」

ピエロはサラリとそう告げ、黒髪の少女に問いかけた。

「貴方も見ますか？」

ピエロは、水晶玉を少女に差し出した。

「ええ」

少女は即答した。

「おや？ 覗き見なんてゲスなことは嫌いなのでは？」

「知的好奇心には勝てないわ」

「ホホホホ」

ピエロは意味もなく笑い続ける。それから、少女は水晶玉に映っている男女を見た。

「ふふっ」

少女は笑みを零す。それを見て、ピエロはシミジミと言った。

「貴方も残酷な人ですねえ」

「そう？」

少女は首を傾げる。その少女に、ピエロは問いかけた。

「貴方はいくつ、『世界』を破壊するつもりですか？」

「うーん……」

少女は考え込む。

「1万くらいじゃないかしら？」

「ホッホッホ、では。何人くらい殺すつもりですか？」

「そんなの分からないわよ、でも、精々10兆人くらいじゃないかしら？ よく分からないわ」

「貴方はなぜこんなことを？」

「暇つぶしよ、悪い？」

「ホッホッホッホッ」

ピエロは笑い続ける。

「そんな貴方が大好きです」

「ありがとう、私は貴方のこと嫌いよ」

「ホホホホホホ。正直な方です」

ピエロは口角を不気味に上げる。少女は嘲笑気味に言った。

「そもそも現実的に考えて、『何でも願いを叶えられる』なんて、そんな都合の良い話があるはず無いじゃない。ねえ？」

「そうですねえ」

「それ相応の代償を支払わないと」

少女はニンマリと邪悪に笑む。

「ああ、今から楽しみだわ。世界を救ったあの子にこう告げるのが、その時の、あの子の表情が」

少女は堪えられないとばかりに言っていた。

「『貴方が救った人は100億人よ、でも10兆人殺したわ』ってね」

黒髪の少女は、タイヨウの持っている蒼い石を見てそう呟いた。
空疎な虚空に乾燥しきった笑いが響き渡った。

12・黒の少女とピエロ（後書き）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでしたM（、、）M
では、コノハs宜しくお願いします^^

13・叶わぬ夢、願い（前書き）

コノハです。駄文を二回も書かせていただくことにどこか罪悪感を感じながら……。どうぞ。

13・叶わぬ夢、願い

僕たちは座って、崖の上で景色を眺めていた。きらめく海と、涼しげな潮風。地面にそのまま座っているけど、やわらかい草のおかげでちつとも痛くない。空を見上げれば白い雲に輝く太陽。遠くを見れば、水平線があつて、空と海とが混じり合っている。隣を見れば、ソラが目を閉じていた。

「……うん、これが、潮風か」

僕の隣にいるソラが、全身で風を感じるように両手を広げた。

「気持ちがいいね」

「そうだな。……なあ、タイヨウ」

目を閉じたまま、ソラが僕に訊いてきた。

「なあに？」

「ずっと、このままでいたくはないか？」

「……」

「ずっとこのまま気ままに旅をして、いろいろな街へ行つて……そうだな、その街の伝統食でも食べ比べてみよう。おながが膨れて破裂するかと思うぐらい食いまくるんだ。街を出たら、街道だ。あんな蜂が化したようなモンスターは出てこなくて、わけのわからない使命に突き動かされて進むんじゃない、ただ行きたい方向に、ただ気の向くままに歩いて行くんだ。危険もあるだろう。盗賊なんかが出るかもしれない。しかしその辺は大丈夫。私は、人間程度ならいくらでも相手にできる。……それだけの力を、持っている」

「ソラ、それは……」

僕たちが気ままに旅をして、伝統的な食べ物を食べ比べて……？ そんな生活、できるのだろうか？ 僕がそう思っていると、ソラが目を開いて、僕を見た。もの悲しげな、切ない表情だった。

「なあ、タイヨウ。このまま使命も世界も何もかも忘れて、ずっとこんな景色を見続けて、ずっとこんな景色のためだけに旅を続

けないか？ 街から街へ旅をして、ずっと、私たち二人で。もしかしたら何かあつて増えるかもしれない。増えた人たちがまた減るかもしれない。けれど、私たち二人が別れることは絶対にない。それは、私たちがそれだけ強い絆で結ばれているからだ」

希望に満ちた夢を独白するソラには、欠片も笑顔が浮かんでいなかった。……叶うことがないって、思っているのだろうか。

「……もし、君がいいというのなら。そして私がいいと思ったのなら。このまま、どこかへ行かないか？ 全てを、忘れて。サポーターとか、世界とか、蒼石とか、何もかもを綺麗さっぱり忘却の彼方に追いやつて、私とお前で、旅をしないか？」

初めて、ソラは微笑んだ。……でも、それはさびしく、悲しい笑顔だった。いつそう深く微笑むと、ソラは顔を僕の方から海へ向けた。

「……冗談だ。君はともかく、私が、この私が、サポーターの私が、使命を忘れれるはずがない。逃げたところで、楽しみが訪れる度、罪悪感にさいなまれるのは目に見えている」

「僕も」

「？」

「僕も、行きたいよ」

自分でも驚くことに、気がつけば口に出ていた。ソラひとりに夢を語らせるのは不公平だと、思ったからだろうか。

「僕も、ソラと一緒に、二人でどこか、遠くに」

「……ははっ」

ソラは短く、僕の夢を笑い飛ばした。けれどその笑いに悪意はなく……むしろ、無理矢理笑っているかのような、そんな印象だった。「まるで駆け落ちの誘いだな。ひたすら北を目指して、逃げるのか？ そしてたどり着いた先で家を借り、働き、子でも成すのか？

……素晴らしい誘いだな。だが、駄目だ」

ソラは短く首を振ると、一気に立ち上がった。

「ダメだ、駄目だ、駄目なんだ！ 私はサポーター、お前は世界

を救う『勇者』だ。役割は絶対、覆してはならない。……少し、私は血迷っていたようだ。たしかに、お前の誘いは魅力的だ。しかし、私にはやるべきことが、成さねばならぬことがある」

さっきまでとは一転、ソラは強い口調になった。けれど表情はさつきよりも悲しく、さびしそうになっていた。

「悲しそうだよ、ソラ」

「……！　っ、お、お前に何がわかる。私は、本来なら夢を語ることにすら許されんのだ。さっきは少し油断したが、もう私は間違えない。私はお前をサポートする。そうしなければならぬ」

少し油断しただけで、あんなふうに願望が口についてしまつて……どれだけ、寂しいのだろう。どれだけ、心細いのだろう。どれほど、現状が嫌なのだろうか。

「もう、何も心配はいらない。何も問題はない。……さあタイヨウ、先を急ごう。こんなところで休憩するわけには、迷っている暇はない！」

ソラがそう叫んだと同時に。海の一部がせり上がり、水柱をあげた。
「……な、なに？」

僕は思わず声をあげて立ち上がる。

「なんだ？　何かいるのか？」

水柱がなくなるのとはほぼ同時、僕たちを照らす太陽の光が、少し陰った。

「……？」

目の上を手で覆って影を作りながら、太陽を見上げる。

「……！　あ、あれは、なんだ！？　タイヨウ、気をつける……」

いや、動くな！」

「え？」

僕はソラの方を見た。僕はソラに襟首を掴まれ、思い切り遠くに投げられた。

「うわあああああ！？」

「叫ぶな！」

世界が横向きになり、一瞬宙を浮いているような感じになつてすぐ、落下が始まる。地面に背中をしたたかに打ちつけて、着地。…痛い。

「い、いた……」

「早く起きろ！ 敵だ！」

ソラがそう言うと同時に、さっき太陽を陰らせた『何か』が、僕たちのいた崖にもものすごい地響きを立てて着地した。

「な、なにあれ？」

「私を知るか」

僕たちの前に立ちはだかるのは、信じられないフォームをしていた。

平べったく、重厚な胴体。僕たちが視ている方が頭だとするのなら、あの中央についている二つの丸とせわしなく動く切れ目は……目と口？ 目と口のある面の両端にあるのは、二つの大きなハサミ。ものすごく強そう。巨大で重そうな体を支えるのは、左右四対の節目立った脚。全体的に堅そうな甲羅に……って。

「……カニ？」

どう考えても目の前にいるのは、カニの化け物に違いがなかった。大きすぎて一瞬わからなかった。

「カニ？ カニだと？ あのカニか？ ああ、甲羅を割って食べる？」

「た、多分」

さっき知らないって……ああ、そうか。ソラも、目の前にいるのがカニだって信じられなかったんだね。

「……っ。さっきまで食べ物の話をしていたからな。わざわざ食われるために出てきてくれたんだ。食物の神に感謝しなければ。……神など、いるはずもないだろうがな！」

提げていたロケットランチャーを肩に構え、射撃体勢に入る。狙いを数秒でつけて、発射。煙を上げながら弾はカニの化け物に向かっていった……大爆発。土煙が上がって、カニのいたところを覆い

隠す。

「……よし。よろこベタイヨウ。今日はカニ料理だ」

「……食べるの？」

「食わねば死ぬぞ？」

でも、あんな化け物みたいなの、食べたくない……。

「キシキシ……」

「え？」

ソラが驚いたような声をあげた。土煙が晴れると、弾頭を撃ち込まれる前と全く変わらないカニの化け物が、そこにいた。

「……はは。頑丈さも、化け物級っていうわけか。……もちろん、味も化け物級にうまいのだろうな？」

自分を鼓舞するように挑発するソラの頬には、汗が一筋、流れていた。

13・5 ピエロと少年（前書き）

やばい。すいません遅れてしまつて……。
今回は中二病の提供でお送り致します、故。

13・5 ピエロと少年

「それにしても良かったのかい？ リュア……石の事は教えなくて？」

俺は、『輝石』のサポーターのリュアに問う。するとリュアは着ていた道化師の服を脱ぎ

顔の華々しいメイクを湖のお世辞にも綺麗とは呼べない水で流す。すると短髪に良く合うボーイッシュな女が現れる。リュアは薄く笑みを浮かべ俺の近くへと座った。

「そう？ ……別に教えなくても大丈夫そうな二人だったと思うけど」

先程の小柄な少年と全身が白の服で統一されている少女、二人の事である。

「それに あれ位で死ぬんだったら、今死んだ方があの二人のためだからね」

「……そうかい。とりあえず、何で道化師の格好なんてしたんだリュア？」

「別に。顔を見られたくないのもあった それに」
「それに？」

「……今は良いわ。どうせ、願ってなくても分かる事でしょうし」
そうリュアが言くと、何かが飛来してくる音がする。

轟音。後方から聞こえてくる。疎ましい虫の知らせ。

大雀蜂。それも俺より十倍はあるだろう、巨大雀蜂。それが俺達の方へ向かってきていた。

見るだけで嫌悪感を覚える雀蜂。……吐き気がする。

「リュア」

「分かってるわ。行くわよ、ルーク！」

彼女が俺の名前を呼んだ瞬間、『輝石』を天へ振りかざす。輝石は神々しい光を放っている。

「……………」

目を閉じ、意識を『輝石』に集中する。一步間違えれば俺とリュアはお陀仏。

失敗はゆるさせれない。

耳からは俺達を殺そうとする雀蜂の五月蠅い音が木霊していた。

「ふう……………終わったか」

俺は安堵感から地面へとすいこまれるように、横たわる。

良かった、生きられた。

俺とリュアの周囲に転がっている蜂。まだ蜂なら可愛いもんだが、何せ『化物蜂』だ。普通の蜂とは違い青紫の血をまき散らしている。不気味の1言。

「はぁ……………」

ため息と安堵の吐息。リュアも先程の闘いで力を使い果たしたのか肩で息をしていた。

たく、こんな時位休めば良いのにな。

この前そう問うた事もあったのだが、リュアはこう俺に言い放ったのだ。

「座つたら 二度と立ち上がれないから。生きるって言つのはこれと同じ事よ。ルーク」

……一体リュアがどんな人生を送って来たのかは俺は知らない。だが、これだけは言える。

彼女は何かを失い、そして何かを得るために生きてきていることに。

「よし。もうそろそろ、行くわよ。ルーク」

「何処に行くか、決まってるのかよ？」

「食料があるところ」

「それは何処の街でもあるだろうが」

俺が立ち上がるうとした瞬間、猛烈な爆音と樹の揺れる衝撃で尻餅を付いた。

なんだなんだ？ 襲撃かと思い俺は辺りを見渡すが、ここより少し遠い位置で鳴ったようだった。

音源は東 あの二人がいるところだった。

13・5 ピエロと少年（後書き）

さあ戦闘シーンを ペンシルさんへ丸投げDA！
タイヨウとソラのバトルシーン楽しみにしてますよー（＃＾・＾＃）

14・島と商人とソラとタイヨウと「真実」。そして世界（前書き）

タイトルが長いとか言わないで。というか、戦闘が嫌いという私の特性を知っての丸投げですか。

皆様と比べて文章が劣化の一途をたどっていますが、ご覧ください。

14・島と商人とソラとタイヨウと「真実」。そして世界

「逃げるってどこに!？」

「お前の思い出の中に!」

それでは現実逃避ではないか。

と、ソラに言う暇さえなかった。

「あばばばばば」

逃げる。というか、実際に逃げ切れているわけではない。すでに追いつかれているし、ソラが走りながら応戦しているのにもかかわらず、蟹の野郎がエヴァンゲリンのごとくクラウチングスタートでダッシュしてきたからだ。

「横歩きはああああ!？」

振り下ろされる鋏をかるうじて避けながら、走り続ける。そのうちフルマラソンにでも出れるのではないか。

「タイヨウ! 石をよこせ!」

「はあ!？」

「石をよこせ! これで撃つ!」

それ前使いかた違うって言ってたよね。

「無理無理無理無理! ポケットに手入れたら死にそう! なんか、転びそう! 死亡フラグ!」

「大丈夫だ! このままだとアイツは確実に私たちを殺す! フラグクラッシャーだから大丈夫!」

「何が!？」

ええい、何も解決しない! 僕は死に物狂いでポケットから石を取り出し、ほうり渡す。

「ホ……それは使い方が違うと言ったでしょう?」

何かが、僕らの間を横切った。ソラとの間に、蒼い石がないこと

振り出しに戻る？

「いいや、あなたは最初の一步を進めてはいない」

「タイヨウ！ タイヨウ！」

ああ、誰が叫んでいるんだ。見えない。手を伸ばしたい。触れない。消えたくない。

「何を、バカな」

立ち上がる。僕はいつの間にか座り込んでいたらしい。視界が、はつきりとする。

「おい、小悪党。お前、何が目的だ」

自分の意思で喋っている。これが、言いたい。と。はつきり思っている。

「ホ、ホホホ……………これはまた、新しい名前がついたものです。では、失敬しま……………」

拳を顔に、埋め込ませる。なすがままに、行商人は殴り飛ばされた。

「あなたが何をしようと、私の言うことは真実ですから……………信じなさい……………信じなさい……………」

また、消えた。

また、逃がした、というべきか。

ソラの緊張も、僕の緊張も解ける。

僕たちは何も言葉を交わすこともなく、蟹のいた位置に目を向ける。

と。

蒼い石……………と、なんだろう。これは。

14・島と商人とソラとタイヨウと「真実」。そして世界（後書き）

また自分のペースに引き戻してごめんなさい。

それはともかく、何が見つかったんでしょう。音操さんにパース。

15 . ここでは無い何処かへ

蒼い石が光を受け、鈍く輝いている。そして、隣にある物……これは？

取り合えず、手に取ってソラと一緒によく見よう。じゃないと、なんとも言えない。

…手に取って良く見てみると、最悪の物だと言つ風に感じた。

「…これ、なんだろ」

「…何と聞かれても…」

ソラと互いの顔を見合う。何と聞かれてても、これには一つしか覚えが無い。膝を擦りむいたりする時に見える瘡蓋。あれに似ている。つて事は……まさか。

「「血の塊…だよな（ね）」」

ドス黒い血の塊。見ただけで吐き気がする。何でこんな物が？

「どうしてこんな物が……？」

「わかる訳無いだろ。大体、これは見かけ騙しだ。ただ、“元に戻った”だけだ」

「元に……戻る？」

「…感じるんだ。この塊は“遺伝子的に私と酷く似ている”」

似ている……？

とにかく、落ち着いて考えよう。

ソラは、『サポーター』だ。僕の持つ『蒼い石』から生み出された…悪く言えば、“造られた存在だ”。

なら、この蟹の化け物は？

あの蜂の化け物を倒した時には何も見当たらなかった。…となると…アイツが関係している？

あの子悪党。胡散臭い占い屋なんかよりもずっと胡散臭い。それこそ、「俺の家はお菓子で出来ているんだZE」と、言う子供並だ。そいつを倒したら、出てきたのがこの物体。

元居た世界のゲームのように、倒したら触媒になった物へと戻るか。そういう類の物なのか…。

もしも、あの胡散臭い子悪党の能力がこれだとしたら。

僕達が今さっき相手にしていた、蟹の化け物の様な物を召還する力だとしたら……。

ソラの恐怖はここから来ているのか。どうなんだろう？

「…タイヨウ」

「何？」

「行こう」

「…行こうって、何処へ？」

「どこでもいい。…とにかくッ！！ここでは無い場所ヘッ！！こんな何も無い場所じゃなくて、もっと意味のある場所ヘッ！！」

「ッ！！……」

驚いた。今までも、感情を表に出しているソラを何度も見てきた。確かに見てきた。…けど。

どうして、そんなにも泣き出しそうな顔で僕の方を向くの？

どうして、そんなにも苦しそうな表情でこの塊を見るの？

どうして、そんなにも辛そうな目でこの世界を観るの？

わからない。わからない。わからない。

どうして。その言葉を並べたらキリが無い。どうして。どうして。

どうしてッ！？

どうしてッ！？一人で背負おうとしているのッ！？何かわかったんなら教えてよッ！？

…二人は同じ道を歩いていると思ってた。僕とソラはどこか違う道を歩いているのかもしれない。

例えるならそれは、道と道路の様に。ガードレールみたいな物が僕達をわけているのかも知れない。

それでも……いつか終わりがあある筈。僕は追いついてみせよう。いつか君と一緒に歩いて見せよう。

僕らは所詮、人と“人ならざる造られたモノ”。けど、そんな道理どうでもいい。

いつか……理解してみせる。

例え、君が君で無くなっても。

僕等は……ダカラ。今は歩こう。どこへでもいい。彼女の赴くが儘に……。

「……そうだね。行こう。ここでは無い……それで入って有意義な場所へ。……“二人で”」

だから、僕達は歩き出す。

潮風が吹き抜ける。新しい道を示すかの様に。

風が吹き抜けた場所を遠めで眺める。そうだ……今度はあの場所へ行こう。

そう……ただ、二人きりで。

15 . ここでは無い何処かへ（後書き）

一つだけ。

一週間ぐらい小説から離れていたらどうしてこうなった!?

ヤンデレじゃあねえか!?

・ ・ ・ 大丈夫だ! ! きっと大丈夫だ! ! 次の人が頑張ってくれる ・ ・
・ そう願いたい。

そして、最近繰り返し言うのが多くなってきましたね。

俺のスタイル、コロコロ変わるな。

前回とは違い、割とシリアスに書いてみました。

と言うか ・ ・ ・

最後のタイヨウの内心の台詞、女じゃね?

シヨタx女 ・ ・ ・ 許せる訳が無えだろうが。

お次は arishia さんかな。

正直、俺の作ったフラグを粉々にしてください。そう期待を込めて
みます。

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3081n/>

ソラとタイヨウのモノガタリ

2010年10月13日01時57分発行